鶏肉

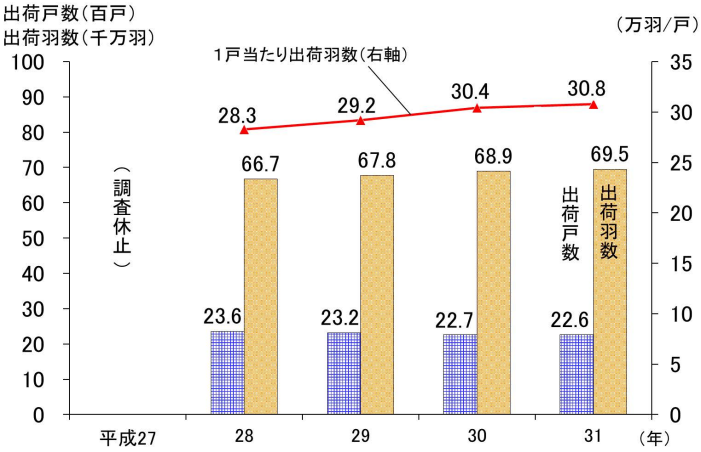
◆飼養動向

３１年２月現在の出荷羽数は前年比０．９％増加

ブロイラーの飼養動向は、小規模農家の廃業や大規模層（年間出荷羽数５０万羽以上）のシェアの拡大を背景に、出荷戸数は減少傾向で推移する一方、出荷羽数は増加傾向で推移している。

平成３１年の出荷戸数は２２６０戸（前年比０．４％減）と前年をわずかに下回った。また、同年のブロイラーの出荷羽数は、６億９５３３万５０００羽（同０．９％増）と前年をわずかに上回った。この結果、１戸当たりの出荷羽数は３０万７７００羽（同１．４％増）と前年をわずかに上回った（図１）。

図１　ブロイラー出荷戸数および出荷羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」
注１：各年２月１日現在。
　２：平成２７年および令和２年は農林業センサス実施年のためデータなし。

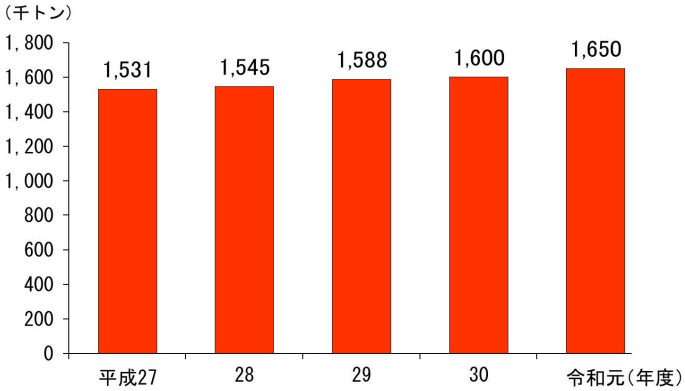
◆生　産

元年度の鶏肉生産量、前年度比３．２％増加

鶏肉の生産量は、消費者の根強い国産志向や健康志向などを背景に増加傾向で推移している。

生産量は、平成２３年度以降、９年連続で前年度を上回って推移している。令和元年度は１６５万３８９トン（前年度比３．２％増）と前年度をやや上回り、過去最高となった（図２）。

図２　鶏肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食鳥流通統計」、「食料需給表」より農畜産業振興機構推計
注：骨付き肉ベース。

◆輸　入

元年度の鶏肉輸入量は前年度比５．０％増加、
鶏肉調製品は前年度比２．５％減少

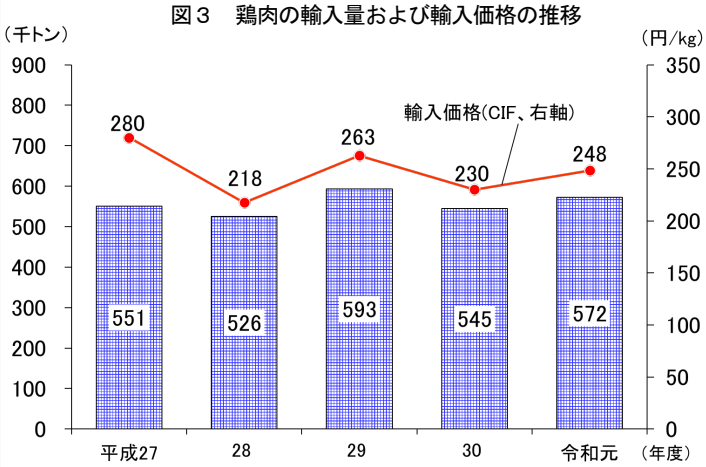
鶏肉

鶏肉の冷蔵品は消費期限が短いことから、輸入品のほとんどは主に加工・業務用向けに利用される冷凍品である。

鶏肉の輸入量は、近年、加工・業務用向けの需要が高いことから、増加傾向で推移しており、平成２９年度に過去最高を記録した。令和元年度は、国内の輸入品在庫の減少などにより、５７万２１１８トン（前年度比５．０％増）と前年度をやや上回った（図３）。

輸入価格（ＣＩＦ）を見ると、１キログラム当たり２４８円（同７．９％高）と前年度をかなりの程度上回った（図３）。

図３　鶏肉の輸入量および輸入価格の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

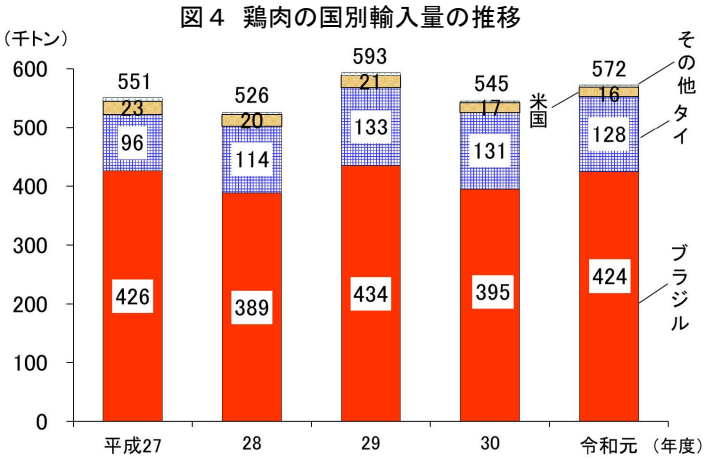
鶏肉の輸入量を国別に見ると、ブラジルが全体の約７割を占める最大の輸入先国であり、タイ、米国がそれに続く。

ブラジルからの輸入量は、増減を繰り返しながらもおおむね増加傾向で推移している。元年度は、４２万４４７９トン（同７．６％増）と、ブラジルで発生した運送関係者のストライキの影響などにより輸入量の少なかった前年度をかなりの程度上回った。

タイからの輸入量は、近年増加傾向で推移していたが、元年度は、３０年度の秋以降、タイ産鶏肉への中国からの引き合いが強まったことなどから減少傾向となり、元年度後半において輸入量は回復したものの、元年度全体では、１２万７９７８トン（同２．４％減）と前年度をわずかに下回った。

米国からの輸入量は、クリスマス需要向けなどの骨付きもも肉が多くを占めている。元年度は、１万６０６１トン（同４．２％減）と前年度をやや下回った（図４）。

図４　鶏肉の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：実量ベース。

鶏肉調製品

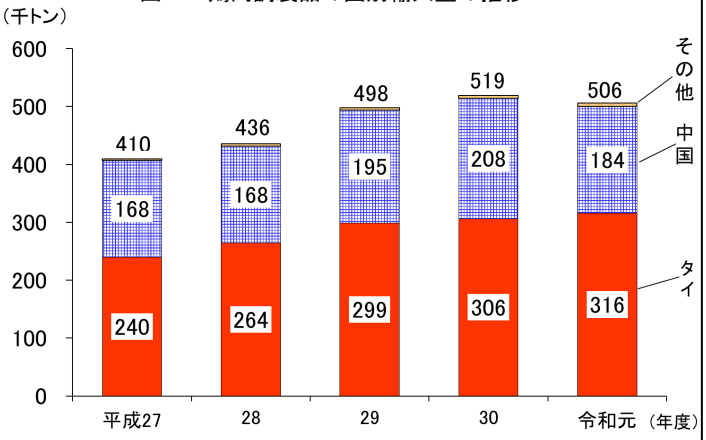
鶏肉調製品（加熱処理や衣付け、調味した鶏肉など）の輸入量は、近年、食の外部化（外食、中食など）の進展や主要輸入先国における高病原性鳥インフルエンザの発生による鶏肉輸出停止からの調製品への切替えなどを背景に、増加傾向で推移している。主な輸入先国は、加熱処理施設が多数存在するタイおよび中国となっているが、平成２５年の中国の「消費期限切れ鶏肉問題」以降、タイ産の割合が大きくなっている。また、近年は、日本国内の鶏肉調製品の需要拡大に伴い、両国からの輸入量がさらに増加している。

令和元年度は引き続き需要が堅調であるものの、中国からの輸入が減少したことから、５０万６０８０トン（前年度比２．５％減）と前年度をわずかに下回った。（図５）。

元年度の鶏肉調製品の輸入量を国別に見ると、タイからの輸入量は、３１万６０７１トン（同３．２％増）と５年連続で前年度を上回り、過去最高となった。

一方、中国からの輸入量は、１８万４１００トン（同１１．７％減）と４年ぶりに前年度を下回った。

図５　鶏肉調製品の国別輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：ＨＳコードは、１６０２-３２-２９０（基本関税率８．０％、但し、ＷＴＯ加盟国（中国）は６．０％、ＥＰＡ締結国（タイ）は３．０％）。

◆消　費

元年度の推定出回り量は前年度比１．６％増加、家計消費量は前年度比０．４％増加

鶏肉の推定出回り量は、近年、消費者の健康志向などを背景に、増加傾向で推移している。

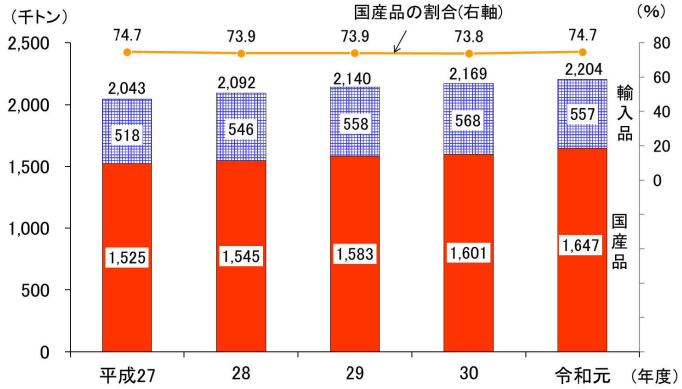
全体の約４分の３を占める国産品は、国産品が大半を占めている家計消費が好調なことから、増加傾向で推移している。令和元年度は１６４万６９２０トン（前年度比２．９％増）と９年連続で前年度を上回り、過去最高となった。

主に加工・業務用に利用されている輸入品は、外食や中食需要の高まりにより、増加傾向で推移しているものの、元年度は５５万７４６９トン（同１．９％減）と前年度をわずかに下回った。

この結果、元年度は２２０万４３８９トン（同１．６％増）と１５年連続で前年度を上回り、過去最高となった（図６）。

なお、合計に占める国産品の割合は７４．７％（同０．９ポイント増）となった。

図６　鶏肉の推定出回り量の推移



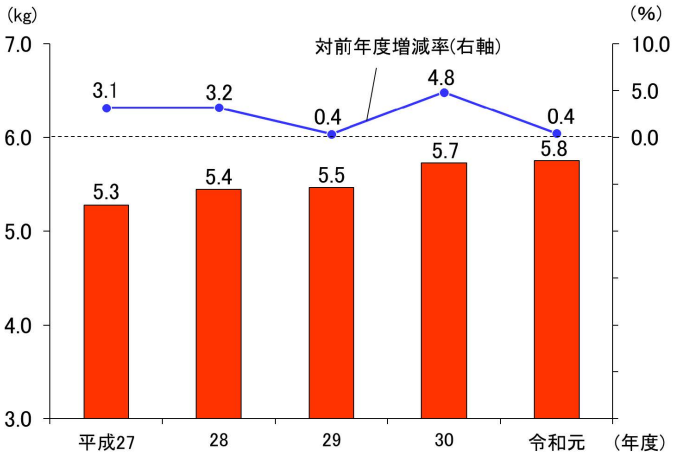
資料：農畜産業振興機構推計
注１：実量ベース。
　２：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

家計消費

鶏肉消費量の約４割を占める家計消費量は、消費者の健康志向を反映し、増加傾向で推移している。

令和元年度は年間１人当たり５．８キログラム（前年度比０．４％増）と９年連続で前年度を上回り、過去最高となった（図７）。

図７　鶏肉の家計消費量（年間１人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

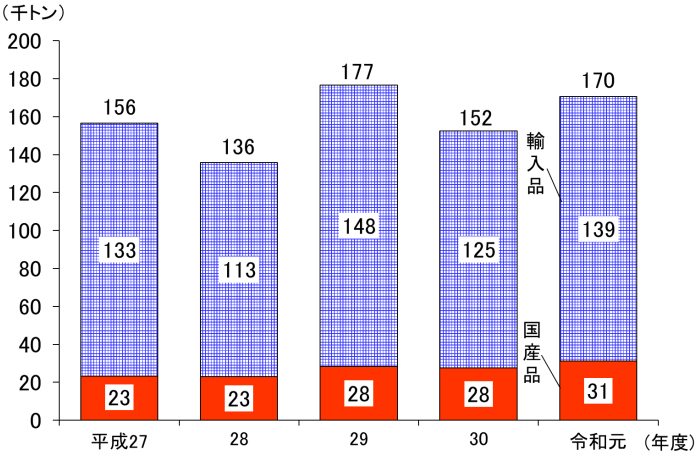
◆在庫

元年度の推定期末在庫量、前年度比１１．９％増加

鶏肉の推定期末在庫量は、その８割以上を輸入品が占めることから、輸入量の動向に大きく左右される。

令和元年度は、近年の国産鶏肉生産量の増加やブラジルからの輸入量増加に伴い、１７万４４７トン（前年度比１１．９％増）と前年度をかなり大きく上回った（図８）。

図８　鶏肉の推定期末在庫量の推移



資料：農畜産業振興機構調べ
注：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

◆卸売価格

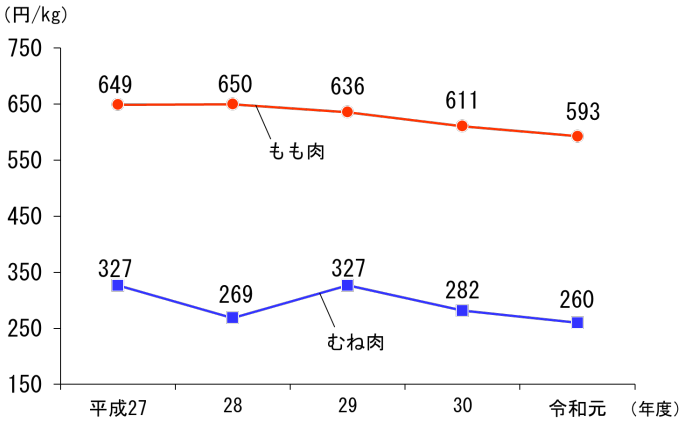
元年度の鶏肉卸売価格、もも肉は前年度比２．９％安、むね肉は前年度比７．８％安

国産鶏肉の卸売価格（ブロイラー卸売価格・東京）は、日本では、「もも肉」に対する消費者の嗜好が高いことから、価格水準が「むね肉」に比べて２～３倍高くなっている。

令和元年度は、国内の生産拡大により、需要を上回る供給が続いたことなどから、主にテーブルミートに仕向けられる「もも肉」、総菜やチキンナゲット、ソーセージなど主に加工・業務用利用の多い「むね肉」ともに前年度を下回った。

「もも肉」は、１キログラム当たり５９３円（前年度比２．９％安）とわずかに、「むね肉」は、同２６０円（同７．８％安）とかなりの程度、いずれも前年度を下回った。（図９）。

図９　国産鶏肉の卸売価格の推移



資料：農林水産省「食鳥市況情報」
注：消費税を含まない。

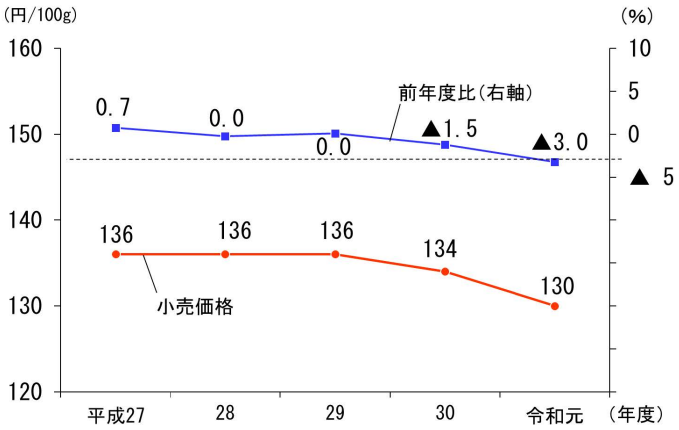
◆小売価格

元年度の小売価格（もも肉）、前年度比３．０％安

鶏肉の小売価格（もも肉・東京）は、消費者の健康志向や他の食肉に対する価格優位性に支えられた好調な需要を反映し、近年は、１００グラム当たり１３５円前後で安定的に推移していた。

しかしながら、令和元年度は、国内の生産拡大により、需要を上回る供給が続いたことなどから、同１３０円（前年度比３．０％安）と、前年度をやや下回った（図１０）。

図１０　鶏肉の小売価格（もも肉・東京）の推移



料：総務省「小売物価統計調査報告」
注：消費税を含む。